

臨場感、

舞台と客席が一体となつた

50年この方、関西で上演されるオペラを数々観てきたが、今回のフィガロは中々思い出せない。「ぎこちな

さ」を感じるところが全くなかつた。パリの下町の小さな劇場で上演されるオッフェンバッハのよくな舞台と聴衆の一体感を覚えた次第。先ず第一に、川西市みつかホールのキャバシティーが500席前後という歌劇

『フィガロの結婚』上演にピッタリのサイズであつて、また点を挙げなければならぬのは、舞台と聴衆の一体感だ。演じられるドラマの中に身を置いているかのような臨場感、心が躍つた。次に衣裳。ベルサイユ風の大仰で時代掛かった衣服や

全ての写真 撮影：仲野達也

く、日本人が身につけてもごく自然で違和感のない近現代的な衣裳によって、18世紀スペインの貴族社会を巧みに描き出した。そして歌手。筆者たの観た二日目は、フィガロに西村圭市、スザンナに村岡瞳、また伯爵に東平

西村は欧米バリトンに比べるとかなり細身。が、深くよく通る声でタイトと相応しい歌唱と演技を披露。対する村岡もやはりソプラノとしては華奢ながら、凛とした美声でスザンナを好演。他方、長い髪をなびかせ、タイトなスースに身を固めた長身高重の演じるケルビーノには少なからず驚かされた。これ程カッコよくケルビーノに扮することができるメゾ・ソプラノがいよいよは。全ては書けないが、その他の歌手陣も一様に

ハイレベルであった。最後になつたが、何より称えたいのは指揮の牧村邦彦とザ・カラツジ・オペラハウス管弦楽団である。欧米の一流オペラを観れば明らかに、オペラの成否を決するのはオーケストラ。また、通常余り顧みられないが、フィガロでは取り分け重要なレチタティーヴォをもの見事にアシストしたチェンバロ（梁川夏子）にも拍手をおくりたい。ただ、一・二幕と三・四幕の間に休憩を入れず、客電も落としたままで、という進行には些か疑問が残つた。

第32回みづなかオペラ

モーツアルト歌劇『フィガロの結婚』

（10月8日、9日、川西市みづなかホール）

演出：井原広樹

指揮：牧村邦彦

（10月9日、門田展弥）

第32回みづなかオペラ

モーツアルト歌劇『フィガロの結婚』

